

『夜の寢覚』物語末尾欠巻部分の一考察

——女主人公の描かれ方について——

山根浩子

序

長編物語『夜の寢覚』は、平安末期の物語評論書である『無名草子』に、以下のように批評されている。

○『寢覚』こそ、取り立てていみじきふしもなく、また、さしてめでたしと言ふべき所なけれども、はじめよりただ人ひとりのことにて、散る心もなくしめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、あはれにありがたきものにて侍れば。(六三頁。—桑原博史氏校注新潮古典集成『無名草子』の頁数。以下、引用は同書による。)

「はじめよりただ人ひとりのことにて、散る心もなく」とあることから『寢覚』すなわち『夜の寢覚』が「女の一生」の物語であることは明確である。

しかし、現存する『夜の寢覚』には、中間及び末尾部分に欠巻があり「女の一生」を最後まで追求し得ぬ恨みを残す。そこで、寢覚の上に焦点を絞って、最終的に女主人公がどのような描かれていたかについて、いささか考察を加えてみたい。

第一章

中間欠巻部分の復元に、改作本『夜の寢覚物語』は重要な資料となるが、ハッピーエンドの物語として終結してしまうので、末尾欠巻部分について比較、対照することはできない。それゆえ末尾欠巻部分の推定梗概は、研究者の間に見解の相違も大きく、敢えて「女の一生」を追うためには、「寢覚物語絵巻」を

助けに、断片的な原作系資料を寄せ集めるしかなく、どうしても想像・推測を交えなければならぬ。

けれども、最終的に女主人公の「死」まで描かれていたか否かに焦点を絞るならば、結論を二者択一できる。そこでその点に注目して、まず考えてみたい。ここに関係する諸先学の御研究を紹介する。(傍線は筆者による。)

A、松尾聰氏(『平安時代物語の研究』昭30・6東寶書房)

少くとも女主人公自身に関してはあはに悲恋の生涯を死なせてゐると見るのが適當であらうと考へる。

B、関根慶子・小松登美氏(『増訂寝覚物語全集』昭47・9学燈社)

死の時期は、女君・冷泉院共に出家してしまえば、女君中心の悲劇は自然終結したわけだし、一方、まさこと女三の宮も結婚すれば、物語の進展上、女君存在の必要はなくなる。女君だけの地位の人をいつまでも広沢にかくれ住ませるわけにもゆかず、物語としても彼女の扱いに窮して来るわけだから、①からはともなく死んだものと思われる。

①とは、まさこと女三の宮の結婚をさす。
C、阪倉篤義氏(『夜の寝覚』日本古典文学大系 昭58・4岩波書店)

その後寝覚上は、広沢の地に、しのびやかに行い澄ます日を過してしたが、程なくはかなくなつた。この世の榮華にまとわれながら、辛

い宿命にもてあそばされ、苦しみの絶え間のない一生であつた。関白や子供たちの悲嘆は甚しかった。

D、鈴木一雄氏(『夜の寝覚』日本古典文学全集 昭49・10小学館)

寝覚の上は程なく、まさこと「夜の寝覚絶ゆるよ」とてなかつた悲しい生涯を閉じたらしい。

E、名越叶氏(『寝覚物語末尾欠巻部分の一考察』『平安文学研究』所収 昭45・11)

寝覚上は広沢でひっそりといひ澄ました日々を送っていたが、やがて今度こそ本当にその薄幸の生涯を閉じた。

F、永井和子氏(『三谷榮一氏編』『体系物語文学中第三巻』昭58・7有精堂)

やがて中君はその生涯を閉じ、この真の死にのこされた人々の悲嘆は一通りではなかつた。

以上、女主人公の「死」が描かれていたとする説である。但し「死」が明記されているという実証ではなく、あくまで各氏の推定された御意見である。続いて、

G、藤田徳太郎・増淵恒吉氏(『校注夜半の寝覚』昭8・4中興館)

出家した後の寝覚上は、始めて平和に後半生を過す事になる。

H、石川徹氏（『校注夜半の寢覚』昭56・10武蔵野書院）

『源氏物語』の浮舟も尼となったところで終っているように、その死に至るところまで書く必要はない。〔中略〕ヒロインの方は、女兒を分嫉した隠れがから内大臣の邸に一旦戻り、その後、恐らく單身広沢に赴いて、父のかつて住んだ御堂でひたすら仏道に精進したと書かれて終っているものと思う。

というように「死」は描かれていないとする説を挙げる。これも前述の如く、各氏による推定である。大勢としては、女主人公の「死」が描かれていたと推定される方が多い。

以下、この点に関する考察を加えるにあたり、大槻修・節子¹¹⁾両氏による「末尾欠巻部分の復元」を手掛りとしてここに引用し、参考にさせていたきたい。

〔23〕その後、寢覚の上は広沢の地にしのびやかに言い澄ます目を過してしたが、程なくはかなくなつた。この世の榮華にまごわれながら、辛い宿命にもあそばされ、苦しみの絶え間のない一生であった。なお、寢覚の上の「死」まで描かれていた否かは、確認はない。ただ、(1)、次の資料〔24〕〔無〕のまさと君の歌「かけてだに思はざりきや程もなく、る夢路に迷ふべし」とは「程もなく」が、やはり母君偽死蘇生によつて安堵、幸せが訪れたかと思えたが「程もなく」ではないか、という事。(2)、資料〔26〕によると、物語三十年位まで描かれていた事になり、寢覚の上出家後、描くべき重要な内容がほとんどないと考えられるにしては、長すぎはしないかという事。(3)、資

料〔25〕の右衛門督の上の記述は、かなり紙幅を費やしてあつたと思われるが、女の眼で女の一生を描いたこの作品としては、寢覚の上死後の方がふさわしいのではないか、と思われる事、などの理由による。(24) かつて嵯峨で寢覚の上の琵琶の音を盗み聞きて以来、寢覚の上のとりになつていた右衛門督は、寢覚の上の死を聞いて、遂に出家を遂げた（〔無〕六六頁）。

〔25〕残された右衛門督の上は、男君関白の思い人となり、対の君と呼ばれて、関白の子供達の後見をする身となつた。父老関白が最も寵愛し、後の位にも上らせたいと願つていた姫君であつたが、この右衛門督の上にとつても運命は辛いものでしかなかつた（〔無〕七二頁）。

〔26〕春宮元服し、春宮の宜耀殿の女御入内する（〔風〕恋二一九一五）。

以上、寢覚の上の「死」に関する説の大筋に対して、意見を異にする立場から、(1)(2)(3)・三つの視点のそれぞれについて章を立て、各章において一層深く検討し、ひいては『夜の寢覚』の女主人公の「死」が描かれていたのか否か、私見を述べてみたい。

第二章

(1) に関して――

『無名草子』の該当の箇所は、（歌番号は筆者による。）

○右衛門督尋ねおはして、

①醒めがたき常に常なき世なれどもまだいとかかる夢をこそ見ねと宜ふ返し、まさこ、

②かけてだに思はざりきやほどもなくかかる夢路にまよふべしとはなどあるほど。

また、右衛門督法師になると聞きて、まさこ、

③これは愛き夢を醒ますと言ひながらなほも現実の心地こそせねとあるこそ、いとあはれなれ。(六六頁)

である。なお同書にみられる桑原氏の注は以下の通りである。

①いつも迷いの夢から醒めずに生きている無常の現世ではあるが、このように悲しい夢のような出来事(寝覚の君の死)を経験したことはありません。

②ほんの少しでも予感しなかったでしょうか。あつという間にこのような悲しみに出会って、歎き沈むだろうということを。まさこ君も母の死を信じていたが、悲しみの中にも事実を冷静に受けとめようとしている。

この注で桑原氏のいう「死」とは、本当の死であるのか、偽死事件を指しているのか読み取りにくいのが、前後の注から、偽死を示すと思われる。ところがこの死を、松尾聰氏は真の死と想定しておられ、冨倉徳次郎氏は行方不明の意と解されている。ということは、②の歌の解釈、とりわけ「程もなく」が何を表わしているのがポイントのようである。

さて、この「程もなく(程もなき、程もなし、も含む)」という語は、歌の一節として割合よくみうけられる。『新編国歌大観』『續国歌大観』『物語和歌総覧』『明題和歌全集』から、抜き出ただけで、七十三首の多きを数える。(重複するものは一首とした。)

たとえば、(傍線は筆者による。)

○なつのすずしき心をよみ侍ける

堀川右大臣

ほどもなくなつのすずしくなりぬるは人にしられて秋やきぬらん

〈後拾遺和歌集・第三・夏〉

○花山院おりなたまひて又のとし、
ほどもなくさめぬ夢のうらなれどその世ににたる花の色かな
待りける
前大納言公任

〈新古今和歌集・巻第十六・雑歌上〉

○以觀麗世、邸氏而郎
前大納言正忠源

むら雲にかくるる月はほどもなくやがてさやけき光をぞみる

〈新後撰和歌集・第九・祝教歌〉

これらの歌の背景は全く違うが、「程もなく」について言えば、時間的な短かさを示す語として使用されている。「程もなく」は、この意味で使用される例が最も多い。

次に、「程もなく」が、贈答歌の返歌に読みこまれている歌をみてみたい。

○故中務の宮の琴をかり給ひて

天つ琴春の調をかりしかば返す物とも思はざりけり

かへし

程もなく返すに増る琴の音は人も留めぬ身をや果らむ

〈伊勢集〉

○をとこ

今宵ねて近江へ行とみし夢の悲しと袖にふるは涙か

かへし

程もなく止ぬる雨に噎るはいかに悲しき涙なるらむ

〈信明集〉

返歌における「程もなく」は、確実に先の歌を受け入れており、独立した一首としてみてしまえば「程もなく」の効果は半減してしまふ。①・②の歌が、右衛門督とまさこ君の贈答歌というスタイルであったことを考え合わせると、②の返答の中の「程もなく」は当然①の歌をふまえていなければならない。

さらに、別れを前提として「程もなく」を読み込んだ歌をみることができる。

○ちちのみまかりけるいみによみ侍ける

藤原相如女

ゆめみずとなげしき人をほどもなくまたわがゆめにみぬぞかなしき

〈後拾遺和歌集・第十・哀傷〉

○少輔入道兼光年頃の妻におくれて歌くと聞きてとぶらひ遺すと

て

程もなき頭の雪を持たながら先に消ゆるを哀とぞ思ふ

〈徒三位頼政朝集〉

○六四 季夫人

定家

ほのか成煙はたよく程もなし馴し雲りに立かくれとも

〈文治二年百首〉

○贈皇后宮ののちのわぎの夜おほしめしやりてよませ給うける

御朱雀院御製

程もなく雲となりぬる君なれど杵の夢の心こそすれ

〈新千載和歌集・卷第十九・哀傷歌〉

「哀傷」という部立の中の歌で「程もなく」とある場合、別れ、とりわけ「死」を前提と想像して、ほぼ間違いないということとは興味ある事である。ところで、①・②の歌は、前後の叙述とのかかわりからみると、「哀傷」の部に分類できるものと思われる。と考えると、①の歌の中に「死」が歌われていることが望ましいわけで、「死」の可能性が考えられるのは、登場人物中の誰であろうか。

「無名草子」の注で桑原氏は、寝覚の上の偽死と解釈されていたが、筆者が考えうる可能性のある人物として取り上げたいのは、夙に石川氏の指摘された「入道太政大臣（寝覚の上の父）」である。

末尾欠巻部分は、物語十六年から始まる。石山の姫君は春宮

妃となり、冷泉院退位の後立后。尚侍の若宮の立太子と重なる。ひき続き寝覚の上進后に、男主人公は関白に昇進する。そのうちに入道太政大臣は七十の賀を迎え、寝覚の上は父の長寿を祝い、中宮の行啓も仰いだ。寝覚の上にとって、末尾欠巻部分の始まりからこのあたりまでは、波乱に富んだ生涯の中で、比較的平和な、幸福な日々が続いていたものと思われる。しかし物語は、

○寝覚の御仲らひばかり、あさからぬ契ながら、世に心づくしなるためし（四五頁。―阪倉眞義氏『日本古典文学大系「夜の寝覚」の頁数。以下引用は同書による。〕

を一貫して追い、偽死、勘当事件が持ち上がる。ところがその後、入道太政大臣については何の資料もない。かといって物語最後まで登場の必要は考えられないうえ、年令的にも無理がある。関根慶子・小松登美氏は、

○我々読者としては、この善良な老父が、最愛の娘の不幸の再発を見ない中に、往生をとげたことにおきたい。

と、「死」の時期について述べておられる。

入道太政大臣ほどの人物の「死」があったならば、何の叙述もなく、それとわかることの暗示さえもなしに、物語から抹消されることはないであろう。となれば①の歌の中の「死」の描

写こそ、入道太政大臣のものと考えることが適當ではないか。

また、寝覚の上が再び不幸な日々を送る契機となる事件を何か設定するならば、これほど適当な事はない。入道太政大臣は寝覚の上にとって唯一の、逃避・安楽の場である。大きな庇護の手を失ったあと、不幸の泥沼にはまり込んでいく寝覚の上が、これからは自分自身の選択でもって生涯を歩まなければならなくなる。そういう意味での「女の一生」が設定されているとするなら、末尾欠巻部分の重要性も考えられよう。

以上のような点から『無名草子』の①の右衛門督の歌は、入道太政大臣の死に際しての悲しみを歌い、②のまさこ君の返歌は、入道太政大臣の死が、七十の賀の祝いの後「程もなく」起ったものであることを示す歌であると考えることができるとはなからうか。

ところで③の歌であるが、『無名草子』に

○また、中のうへ失せ、右衛門督法師になりなどしてのち、（七一頁）とあることから、「中のうへ失せ」の後に③が歌われたことは確かである。関根慶子・小松登美氏は、

○「中の上うせ」は偽死と考え得ない事もないが、まあ本当の時と考えるのが自然であろうし、偽死で出家したのではあまりにも彼が喜劇的存在となる。

と説明されている。右衛門督という人物は、寢覚の上の存在を奏上するという、物語上不可欠な役割りを担うものの、寢覚の上を恋慕しながらも手に入れられず、あげくに義理の娘を妻にするという、かなり三枚目の役柄である。寢覚の上の偽死が描かれた時点で、読者は「死」を信じたと思われる。それゆえ出家した彼にしみじみ同情し、改めて寢覚の上のすばらしさを読み取ったのではなからうか。その後偽死だと判明したからといって、読者が出家した右衛門督を喜劇的存在として嘲笑するような真似をしたとは思えない。

視点を変えて見ると、偽死事件の後、冷泉院の出家があったと考えられる。冷泉院と寢覚の上を實質的に引き合わせる存在であった右衛門督は、院が出家してしまえば役割りは終了し、物語の第一線から退くことが考えられ、出家という形でそれが実現したのではないだろうか。

また、「拾遺百番歌合」詞書に、

〇七番右 蟬峨にて宰相のきみのつはねにて女君の琵琶のねをき
入道右衛門督
とて

とあるように、法師になる時すでに右衛門督であり、これは現存巻五の末の司召で昇任した官位である。物語最終まで登場するに於ては、官位が以後加わらないものもおかしいので、偽死事

件に際し、右衛門督として出家したと思われる。

このように考えると①と②それに対する③の歌は全く違う場面のものであることになるが、実は、「無名草子」の「夜の寢覚」に関する記述の中で「また」という語が使用されている箇所は、話題とする場面の「転換」の時である場合の多いことからも、十分理解されることである。

第三章

(2) に関して――

資料〔26〕に述べられている春宮というのは、現存巻五の末（物語十六年）に誕生した、尚侍（故関白の長女）腹の若宮。宣耀殿の女御については『風葉和歌集』に、まさこ君の歌があり、かつてかりそめの恋を語らった仲であることがわかる。

改作本において、まさこ君元服の年齢が十二歳であり、『源氏物語』において、夕霧が十一歳、薫が十四歳で元服している事から、元服は、十一―十四歳であったものと考えられる。故に春宮元服は、物語二十七年―三十年頃の事と推定できる。

寢覚の上は、現存巻五で出家遁世を願うものの、懐妊しており実現できず、折を見て必ず出家しようと願っていた。最終的

には欠巻部において出家が敢行されたと思われるが、時期については断定できない。けれども女兒出産以後、まさか君が寢覚の上の手紙を持って冷泉院に拜謁する以前であるはずで、物語二十二・二十三年の間のことと考えられる。すなわち寢覚の上出家後の物語は、短くて四年、長くて八年の「時の経過」があったと思われる。

寢覚の上自身の年令について、

○中の君の、十三ばかりにて、まだいといはけなかるべきほどにて(四六頁)

とあるため、物語終結時における年令は最高四十三歳である。出家後最長八年、四十三歳までというのは、物語として長すぎるものなのであろうか。ここで、女主人公の側に重きのおかれている物語をいくつかみてみたい。

『在明の別』の女主人公は、神示により幼少時より男装し、隠れ蓑の術を持つ権大納言十六・七歳として登場し、物語三十三ないし四年を経て、四十歳の女院として物語終了まで登場する。

女主人公の最終的な地位が同じく女院である『わが身にたどる姫君』においては、関白と皇后との間に生まれた姫君十五歳から五十七歳までの物語四十五年を描く。物語四十二年、女院

崩御の場面は、

○院の上・大皇太皇の宮、皇后の宮、みな四十路に満たせたまふべき年は、御賀の事などかねてののしりしかど、いとくちをしようあへなき女院の御事に、よろづいよかひなし。

ときわめて簡略な記述におわる。この物語が女院を主人公に据えてはいるものの、一代記的な物語ではなく、一族の消長を描いた歴史物語的な構想を持つため、女院は一族の運命を見定め崩御とならざるをえない。

一方の『在明の別』では、主人公が女院として本来の姿にかえた後、物語は叔母である女院に恋情を燃やし続ける左大臣、中宮への思いを捨てきれない三位中将、栄達した女院の子供、女右大将の遺児たちというような人物によって展開していく。宿世の苦しみが、女主人公から周囲の脇役達に拡散するものの、彼女の想う宿命ゆえ物語終了まで存在する。

『夜の寢覚』に深い影響を及ぼした『源氏物語』は別名「むらさきの物語」といわれており、紫の上がその前半の女主人公である。

○ものにまきるへくもあらずたかくきよらにさとにはよみ心ちらして春のあけほの、かすみのまよりおもしろきかはさくらさきみたれたるをみる心ちす(八六四頁 野わき 池田龜麿氏『源氏物語大成』の頁 敬。以下引用文は同書による。)

最高の美女の容姿があでやかに描かれている。寢覚の上について、

○泪のこぼれそふまゝに、うちあかみたる御色あひ、顔の気色、よくさきこぼれたる八重桜の、朝露にしはれたるを、霞のまより見たらず心地するを、(二八八頁)

とあり、主人公たる女性を、紫の上になぞらえようとした作者の意図が感じられる。紫の上は若紫の巻で、

○さてはわらへそいていりあそふ中に十はかりやあらむとみえて(二五六頁 わかむらさき)

とあるように十歳で物語に登場。その最期は、

○まことにきえゆく露のこゝちしてかきりにみえ給へはみず行のつかひともかすもしらすたちさはきたりさきくもかくていきいて給おりにならひ給て御物のけとうたかひ給ひてよひとよさまくの事をしつくさせ給へとかひもなくあけはつるほとにきえはて給ひぬ(二三九〇頁 みのり)

と秋の露に譬喩される死である。この後、源氏・夕霧の愛憎の情・御儀、致仕の大臣の弔辞と続くが、そこで語られるのは、死者である紫の上の美しさと、葵の上の死との対比である。池田龜鑑氏が、

○源氏の中にも多数の死が描かれている。たとえば夕顔・葵の上・紫の上・宇治の大君などのように、特に死を描いている場合も少なくない。

しかも死の悲しからぬはない。敢えて死を描くのは、死自体がこれを描くに値する、言わば美しい詩であり絵であるからである。

と述べておられるが、紫の上の死は、描写する価値の認められた死といえよう。葵の上の死については、

○うちに御せうそきこえ給ほともなくたえいり給ぬ(三〇三頁 あゆひ)

「絶え入る」とあり、即物的な表現である。葵の上の死は、描写する価値のある美をそなえたというより、光源氏と、藤壺のゆかりの紫の上―葵の上にはない母性的なものを持つ存在としての―結婚を可能にし、紫の上の幸せを約束するための伏線として、やむなく用いられたという方が適当ではなからうか。

『夜の寝覚』の主人公の姉大君は、葵の上に似ると考えられるが、中間欠巻部分にその死が描かれていたと思われる。詳細は不明だが、現存巻五に、

○姉君の、命をさへいとひすて給ひてしためしを思ふ、ゆゝしく(三二九頁)

と回想があり、『風葉和歌集』に

○入道太政大臣女かくれ待て日数すきていてけるにすゝきのうちまねひたりければ
まねけとも君なき宿は花すゝき涙さへこそとまらさりけれ

ねさめの因白

〈巻九寝覚〉

とあるだけで、描写する価値のある、美しい死の場面であったとは考えにくい。大君は葵の上同様、女主人公と男君の結婚を妨げる存在で、物語進行上の必然性から死を強いられたのである。物語中、同じ立場にある女一の宮は、後に帝と寢覚の上の交渉を設定するために、不可欠な人物であるため、この時点ではその死は全く問題になっていない。『源氏物語』の葵の上と『夜の寢覚』の大君が同一の型で描かれていることは明らかであるが、紫の上と寢覚の上についてはどうであろうか。

紫の上の物語登場は前述の如く十歳。逝去は四十三歳。紫の上物語は三十三年であり、その死の時期はいみじくも寢覚の上の年立にほぼあてはまる。とはいふものの、紫の上の場合、その死なくしては光源氏の出家の決意、そして死を導くことができな。一方寢覚の上の場合、物語はすでに終結部に入っており、寢覚の上の死なくしては実現しえないことは、もはや何もない。このことは、死の美しさを生み出す価値がすでになくなっていることを示すといえよう。この場合寢覚の上の死は、まさに描かないで読者の想像に委ねる方が効果的であるといえよう。

次に、『無名草子』に

○『狭衣』こそ、『源氏』に次ぎてようおほえ侍れ。(五八頁)

と評価される『狭衣物語』との関わりをみていきたい。永井和子氏は、

○『狭衣物語』は、中古末期から中世にかけて、『源氏物語』につく人氣を得ており、藤原定家もかなり関心を抱いていたのはなぜであらうか。一つには、『新古今和歌集』に代表される象徴的な世界への志向、現実を再構成して新しい美しさを生み出そうとする姿勢と、共通した何ものかがあったことによる(同様に、『夜半の寢覚』の今日残存していない第四部が中世の人々の注目を集めたという事実も、第四部の復原を考える上で何らかの手がかりとなろう)。

と述べておられる。『狭衣物語』では、男主人公が予想外にも帝位に即き、源氏宮の形代を得る。

○その後、飛鳥井姫は狭衣帝の姫として装束をした。若宮も暗れて帝の一宮として元服し、藤原女御腹の二宮も袴着をして、狭衣帝の子孫の栄えを予想させた。かように表面的には華やかな狭衣ではあったが、心中ではなお源氏宮を忘れ得ない。飛鳥井女君や女二宮とのことも後悔の念のみ深い。身は榮華につつまれても、現世を厭う心は拭い切れないのであった。

以上、『狭衣物語』の巻四の梗概をみると、『夜の寢覚』とオーパーラップする点がある。『狭衣物語』で、「めでたし、めでたし」と終るはずなのに、女二宮に対する狭衣の苦悶、憂愁で結

び、
○よ、もにもものをおはしてすきぬることいかなりけるさきの世の

契にかと見え給ける

と女二宮付きの女房の口を通じて語らせている。同じく『夜の寢覚』においても、まさこ君が勘当を解かれ、咄れて女三の宮と結ばれたところで「めでたし、めでたし」と物語を完結し得ようものを、宿世を背迫う寢覚の上を描くために、現実の榮華とを裏腹に、出家によつても苦悶、憂愁をのがれられない宿命を、さらに描き続けてあつたものと思われよう。鎌倉末から室町初期に作られた改作本『夜寢覚物語』が、いちはやく大団円で幕を閉じている「めでたし、めでたし」物語であつたが、「中世の人々の注目を集めた」のが、現世的なめでたし物語ではなく、末尾欠巻部分にあつたと思われる「宿世の物語」であつたと考えられるのは、興味あることである。

死は悲しくてつらいけれども、死んでしまえば全て終わりである。現世を拒否して出家はしたものの、それは寢覚の上にとつて、すべてからの救済ではないものとして描かれたなら、最も正確な意味で全編主題貫徹となりうる。

以上のように考えると、出家後の歲月が物理的に長すぎ、もつと短期間であるべきだ——と考えるより、むしろ出家後の時間というのは、寢覚の上、ひいては読者にとつても、永遠の非救済を思わせる物語の主題を支える軸となつて、暗く果てなく

続けられるべきものであるといえよう。

第四章

(3) に関して——

『無名草子』における右衛門督の上の叙述は、

○また、中のうへ失せ、右衛門督法師になりなどしてのち、右衛門督の上、殿の思ひ人にて、対の君などいふ名つきて、君たち後見してあるだに心づきなきに、うけばりて物惣じなどしたること憎けれ。父大殿の、あるが中にかしづき、人柄もいとよかりしに、浅ましく思はずに、口惜しき人の契りなり。(七一・七二頁)

とある。「中のうへ失せ」については、第一章で寢覚の上の偽死であると考えた。

次に「うけばりて物惣じなどしたる」が、いったい誰に對してはばかりなく嫉妬しているのか考えたい。まず女一の宮が考えられよう。

○いとことほりなる御もてなしを思ひしり顔ならん、わが思さまにはたがひて、うたであるべし(三七九頁)

○人の御心は、かばかりこそはあらめ。うらめしき節やは、つゆもまじる。やむごとなき片つ方のたらならび、やすげなきは、我身の契の憂きがをこたりにこそあれ(三九二頁)

これは寢覚の上が、女一の宮の存在に安心できない自身の宿命の辛さを語っている場面である。寢覚の上でさえこのようなら、右衛門督の上ならばなおさらであろう。同じ女一の宮に対して大君も深い愛いを感じるが、女兒出産後間もなく女一の宮に恨みを残して他界している。

また『源氏物語』の紫の上は、六条院の女王として華やかに振舞っていたが、女三の宮降嫁という出来事が、死へ向かう導火線となっている。同様に、

○あふての恋もあはぬなげきも、人の世にはさまくおほか^らる中に、
こけの衣の御なからひばかり、あかねわかれまでためしなく、哀なる事はなかりけり。

という『夜の寢覚』と似た冒頭を打つ物語『昔の衣』は、右大将とその北の方の「こけの衣の御なからひ」を描くことが中心であるが、二人が結ばれて後、冷泉院女一の宮降嫁と、折からの父右大臣との死別にあつた北の方は、嘆きから病づいて遂に二十八歳の若さで世を去ってしまう。

以上の如く、やむごとなき身分の女性に対する嫉妬は、死への路線を想定できる。寢覚の上の場合も、女一の宮ゆえに、帝・大皇宮の登場となり、遂に偽死に至らざるをえなかったのではなからうか。帝の姫君に対する嫉妬の報いが死であるとい

うことは、帝の権威を考えていく上でも興味のあることではあるが、やはり右衛門督の上の嫉妬が、女一の宮に向けられるのは適当ではない。

また女一の宮自身、冷泉院が出家を遂げる時点で、物語上必要のない人物となる。というのも、帝が寢覚の上を恋慕うための契機として女一の宮登場の必要があり、帝が直接に寢覚の上を追うことができなくなれば、もはやその存在は取るに足らない。その点をはっきり割り切っているのが改作本『夜寢覚物語』で、一旦男君のもとへ女一の宮降嫁の許可がおろるが、後に齋院に決定し婚約解消となる。この意図的改作は、大団円のために支障のある女一の宮抹殺のための手段であろう。

さらに、男君の気持ちたちが女一の宮に落ち着かないために、大皇宮が暗躍し、恐ろしい企てを巡らしたことは、右衛門督の上も周知のことであり、表面的にはとにかく、男君と深い心のつながりのない女一の宮に「憎し」というほどの嫉妬が起るとも考えにくい。

となると、嫉妬の相手として考えられるのは、やはり寢覚の上である。とはいふものの、寢覚の上と右衛門督の上が、互いに身の上を嘆く場面では、

○かばかりならびなく、すぐれ給へる御有さまながら、いと照かきりな

き程にはあらず、たえず物なげかしうのみ思したるを見れば、まいて、憂き身はことほりなりや(二六九頁)

と右衛門督の上は、寢覚の上のすばらしさを思い、我身の分を受けとめようとしている。かつて大君が、女一の宮を受け入れた男君ではなく、女一の宮へ嫉妬の矢先きを向けたように、このような憎しみの気持ちというのは、起因となる女性に向けられることが往往にしてある。右衛門督の上にしても、夫が出家し自分一人が残されたのは、他ならぬ寢覚の上ゆえとあらば、その心中は想像に難くない。

右衛門督の上自身の記述を追ってみた。

○いと、寢覚あかされんなくさめにも、この君は、いますこし言ふかひある心地もし給へば、(二六四頁)

○ふかうちなげきつ、語らひ給に、いとさしすきてはあらぬ物から、ものにとよう心え、言ふかひあり、あはれげに答へ、(二六八頁)と寢覚の上の目を通して、しみじみ語り合う相手として認められ、人柄のよさもしのばれる。また、

○上も、かの御契のこよなかりけるは、人のおこたりならねば、言ふかひなし。おほかたのありさま、わが御心ざしは、督の君におとしきこえんことはいと心ぐるしうて、私のもに、この御方をぞ思ひきこえ給。なに事もまづ聞えあわせ給に、物ふかく、言ふかひあるかたもいと目やすくものし給へば、さらぬ顔にて、ことに御心よせをあさか

らず見知られ給ても、身のみ口をしくおぼゆれど、思ひしり顔ならんもなか／＼なれば、男君の御まへにては、た、おほどかなるさまにもてない給へるなどぞ、いと目やすう見給へる。(四〇〇・四〇一頁)

と現存巻五最終部に、たいへん良く描かれている。しかしこれ以降は、『無名草子』の記述を待つまで何の資料もなく、物語十六年以降の動静はわからない。

ただ『無名草子』の記述をみると「人柄もいとよかりしに」(傍点筆者)とある。「し」は直接の経験を述べる場合に用いられる、過去の助動詞「き」である。ということとは『無名草子』の筆者が自身『夜の寢覚』を読み、以前は人柄もたいそう良かったのに、対の上となつてからは……と直感したことであつたはずである。ではいったい寢覚の上の何に対して嫉妬するようになったのであろうか。人物設定からみると雲泥の差があり、その点に関するものも考えられようが、母としての寢覚の上ということだといえないであらうか。現存巻五最終に、

○かくてあるも、あるとおぼえず。幼き人々のかず／＼見すてがたく、
「これかれの御あつかひを、われさへ知らずなりなば、いかゞは」と
思ふばかりに、ながらふるにこそあれ(四〇二頁)

とあり、出家の念願がかなわないのも子供達ゆえであると、寢覚の上の心中が描かれている。それが、末尾欠巻部分のまさこ

君勘当事件に際して、隠していた身を現わしてまで解決を図ろうとする。子供かわいさゆえ、我身を捨てての行動である。石川徹氏は、

○平安時代にあつては、出家して尼になれば、夫との肉体交渉はなくなるのであり、子供たちの面倒も見ないし、家事にも従事しない。仏に身も心も捧げるのである。

と述べておられるが、寢覚の上の場合、出家した時点でまだ幼ない子供が二人あり、子供達の実生活の後見として右衛門督の上がいたと考えられる。末尾欠巻部分に至つて「母」である意識を押し出した寢覚の上の存在は、世話役である右衛門督の上には疎ましくあつたのではなからうか。又、右衛門督の上自身に実子があつたという記述は見当たらず、子を持たない母の、生みの母への嫉妬のような感情があつたのかもしれない。このような嫉妬の対象として寢覚の上を取り上げること、右衛門督の上が、対の君となつた以降も生存の必要が考えられる。

最後に、寢覚の上が物語途中で没したなら、右衛門督の上が物語を背追っているであろうか。『源氏物語』は「いとまばゆき際」という光源氏亡きあとの物語を、宇治十帖という形で展開している。その担い手には、匂宮・薫という二本の柱を用意する。『夜の寢覚』にひきもとしてみた時、寢覚の上という

人物を、右衛門督の上一人で、引き継ぐことが可能であろうか。

右衛門督の上は、物語の途中で登場の必要のなくなる女一の宮と比較してみても、その叙述はひとまわり押さえられている。寢覚の上にしても女一の宮に對してこそ生霊事件などがあつたが右衛門督の上ではどうであらう。

○気色もり聞くに、宰相中将の上こそ、いと大人しく、おもちかにものし給へるめれな。あるが中に、殿のやむごとなきさざし給けんしも、いとあきはかに名残なしや。(三八五頁)

と男君の語る場面があり、対の君となる伏線であるといえるが、あくまで寢覚の上の形代として男君と結ばれる。

以上のことから、寢覚の上とあいまってこそ男君と右衛門督の上の仲の意義が認められ、そこに形成される精神的な三角関係の中を、出家したもののやはり安堵が得られず、「のちの世をだに」と願う寢覚の上の「女の一生」の物語が描かれていたと考えられよう。

結語

「寢覚の御仲らひばかり、あさからぬ契」を一貫して追う物語の、末尾欠巻部分において、女主人公の「死」が描かれてい

たのか否かについて、考察を加えてきた。

ここに手掛りとした、大槻修・節子両氏による「末尾欠巻部分の復元」の、三つの視点のそれぞれを、否定する形でまとめたい。

寢覚の上の「死」まで描かれていたか否か、確認をとることにはできないが、

(1) 「無名草子」のまさこ君の歌「かけてだに思はざりきや程もなくかゝる夢路に迷ふべしとは」の「程もなく」は、入道太政大臣の七十の賀の祝いのあと「程もなく」彼の死が起こったのではないかという事。

(2) 寢覚の上出家後、最長八年間、四十三歳までの物語は、出家によっても苦悶・憂愁をのがられない宿命を描き続けて、暗く果てなく読者の心に流れ続けるものであったと思われる。そして寢覚の上の「死」という事は描かれず、読者に委ねられたものであったという事。

(3) 右衛門督の上の記述はあったが、寢覚の上に対し嫉妬する人物として、あくまで寢覚の上に寄生する存在である。そのため物語を一人で担うことはできず、男君をめぐる精神的な三角関係を形成していたと思われる事。

以上のような理由から、寢覚の上の「死」は描かれず、物語

終了まで女主人公として登場していたものと考えたい。

不完全な憶測をまぬがれぬ点多々あると思われるが、末尾欠巻部分における女主人公の描かれ方について、ここにいささか思うところを述べてみたわけである。

注(1)「夜の寢覚一と五」影印校注古典叢書21(昭58・6新興社)末尾欠巻の復元は五

欠巻の復元は五

(2) 「校注夜半の寢覚」(昭56・10武蔵野書院) 以下、石川氏の御意見の引用は、同書による。

(3) 「増訂寢覚物語全釈」(昭47・9学燈社) 以下、関根・小松両氏の御意見の引用は同書による。

(4) 財団法人日本古典文学会代表山岸徳平氏 日本古典文学影印叢刊14「物語三百番歌合風集和歌集桂切」(昭55・8貴重本刊行会) 財団法人日本古典学会内)

(5) 徳満澄雄氏「我身にたどる姫君物語全註解」(昭55・7有精堂)

(6) 「物語文学1」(昭43・4至文堂)

(7) 「増訂校本風葉和歌集」中野莊次・藤井隆氏(昭45・1友山文庫)

(8) 秋山虔・藤平春男氏「中古の文学」(昭51・7有精堂)

(9) 大曾根彦介・久保田淳・楡谷昭彦・堀内秀晃・三木紀人・山口明穂氏編「研究資料日本古典文学 第一巻 物語文学」(昭58・9明治書院) 巻四梗概は「袂衣物語」堀口悟氏による。

如吉田幸一氏「私家版「古典聚英」別冊深川本袂衣とその研究」

(昭57・12 古典文庫)

川久前神昇氏「昔の衣上・下」(昭29・4 古典文庫)

付記—本稿筆者の山根浩子は、昭和五十九年三月、甲南女子
大学国文学科を卒業、四月から兵庫県立舞子高校の国語科
教諭として、すでに教壇に立っている。本稿は、その卒業
論文の一部として、在学中の研究に裏打ちされ、然るべき
努力の成果が見られるように思う。今後の本人の研究が、
より一層のこと充実することを期待して、指導教員の立場
から、先学諸賢のご鞭撻をお願いしたい。

大 規 修